還魂紙料

上

1 曽 5
102
1

小幡文庫

一日或ひとり此猪牙松の下にあるを
取て頭領するに耳か附大に笑て
以は孔琴笙笛ハ耳よりはゐるに
声を申へし絃琴箏琵琶も
指にかゝり欲しして調へしとハ孫様
孔絃之鳴らす者も吹出声あるを覚

音5 102 巻1

絃無孔ハ琴ノ笛よりかり破ちたを
補ふよ暗一ヱて投次已答て以ふ
さらハ是を還魂紙料と號ん紀者
是いて其故ハ名とそ

足薪翁

還魂紙料目録

上之巻

一 千年飴
二 因幡ヶ淨瑠璃 附 近江節
三 鹽屋長次郎
四 若衆人偶
五 安阿彌の作
六 懸髭
七 淨土雙六 附 治郎雙六 道中雙六
八 淨瑠璃節の起原
九 キリコ燈籠
十 喉ヶ渇とりの諺
十一 東屋吉郎兵衞
十二 雛の蛤貝
十三 秋色櫻
十四 來迎賣
十五 いとこ煮 附 須彌山
十六 八百屋阿七のかぶき
十七 梵天國 附 六段目

下之巻

一 七夕踊 小町踊 ろけ踊
二 糒の肴板
三 酢の肴板三種
四 十筋右衛門
五 慳貪
六 玉川千之丞
七 柴垣節
八 江戸酸漿
九 稲荷岡 附 小砂とり
十 淺草祭の番附
十一 煙草の一服一錢

目録終

還魂紙料上之巻

江戸 柳亭種彦編

一 千年飴

元禄宝永の比江戸浅草に七兵衛といふ飴売ありその飴の名を千年飴又寿命糖ともいふ今俗に長袋といふ飴を千歳飴と書しと彼七兵衛に起り生質酒をこのんで世事にかゝはらざる一奇人なり【今様廿四孝】宝永六年印本 二の巻に曰「千年の七兵衛といふ飴売あり楽に養ふ子のなかりけるまゝに心にかゝらず江戸中を足にまかせて童に翫ばし價の錢を殘さずそゞぐに処として酒にひたし春秋の栄枯を息なし一喉の一盃にうちをあけて身のうちね声をきかさくころころと頬髭をかき町のさる野良のわやくなとまうさまね云〻」寶永六年に久しく歎をのこるともまた貞享或は元禄の初より千年飴を人に知らるゝの証なり【世間用心記】刺撲の鞘号 未考 一の巻に「浅草の千年飴は其のむかし天竺にて釈迦と同じ傍邪年といへり童部に告縁ありて此寿命糖を翫ばして大きうなりし大道に肩をぬぎて天に指ざし廣へ

お江戸にかくまであり。京にもよくれ若者まみねと踊く。さされぞまでかしハ大坂の生まれぢや
ちりと志るそとありて志んかれるのもふあるまてあらしとられさそのくとるゑ他ふもてはやされて云ゝ
かくあまりバちゝく江戸ゆて流行し土平おとま飴売が鼻祖ともいふべし　其角文集

〔類柑子〕
前句　弱形へわかれの旅人か　佑　蓮之
附句　笠ぐ見知るも清十郎千　只　只尺　宿其角十三回忌追善ゆゑ享保四年の吟なり

浅草寺々と常に徘徊せるふより弱形といふ句に附異なる笠をかぶりしゆゑよ笠で見知るといひしなるべし。清十郎ハ阿夏と云ふあやまり播州姫路の者にてまても知る○向ふ通るハ清十郎ぢやないか笠がよう似た菅笠が○といふ小唄をとりあはせ吟なり。又〔俳諧繪文匣〕印本 享保七年の小千年飴の姿絵あり荷箱の上に陶と茶碗をおき笠をいだし公羽の天へ指さしたるところを画き「初夢の数も聴くる鶴の声　竹巴」といふ画題の発句あり天に指さして小唄をうたふゆゑに釈迦乃子に見る傍に飛と〔用心記〕に数多いふなり　絵文匣ゆゑんえる千年飴の男へ下に出しく吉ゑ衆が像に略あるし　おとふ拙画あまたあるに載ず

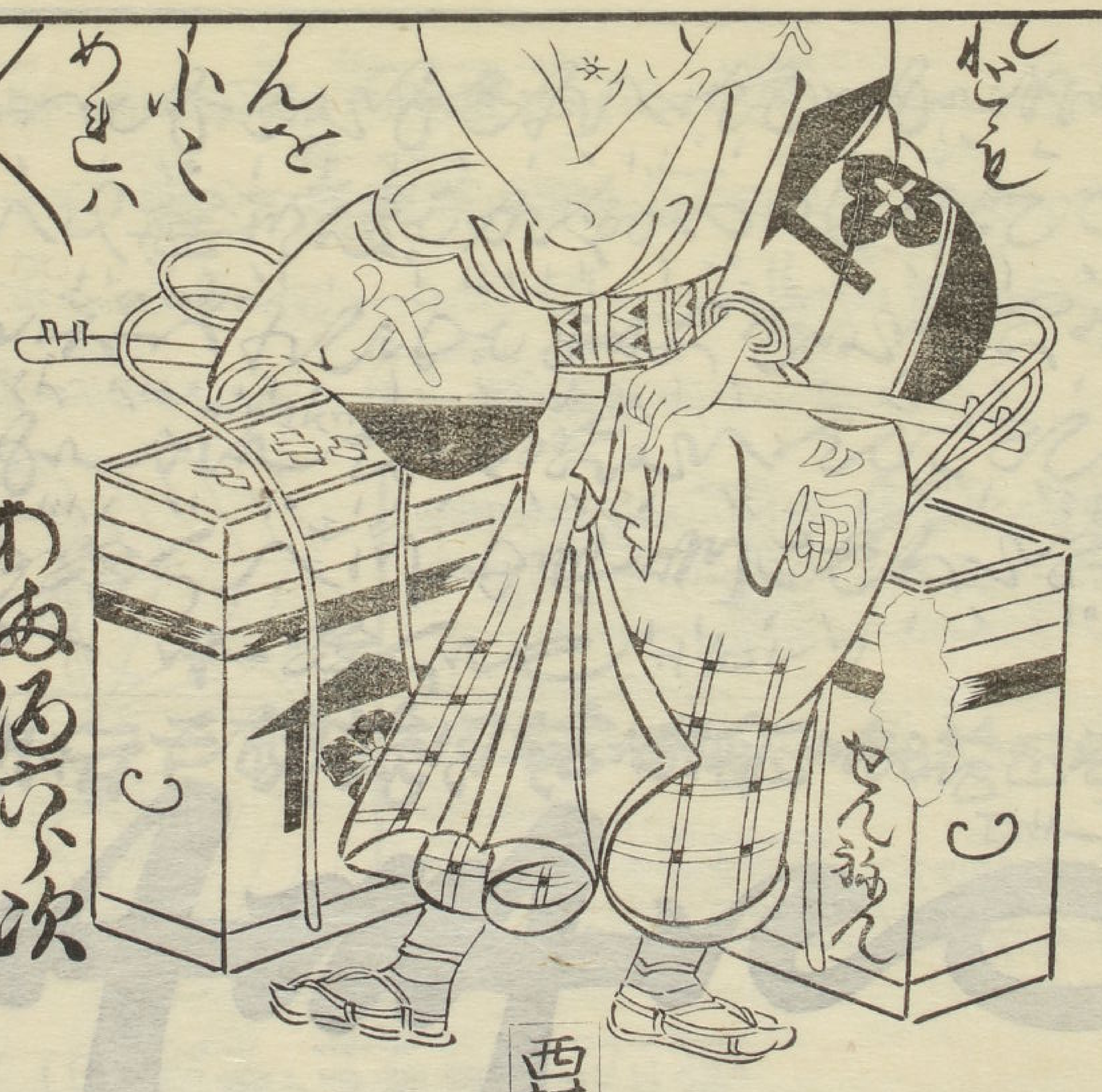
○中村吉兵衛千年飴七兵衛ニ打扮小肖像　享保年間の一枚絵あり丹黄彩の艶ゆて色どりまで

中村吉兵衛ハ異名を二朱判吉兵衛とて世に志られてゐるかぶきの道外方あり木挽町とあまりバ森田座なるべきまで何といひし狂言ら未考

○庵ハ木瓜の紋と附たるハ曽我のかぶきに彼千
やま酒右衛門次といふ者の傳系を知らざるが
間のわけ歟

千年壽命糖ごま六日な小田る
志ゞの粒か八宗仏浄土そし
若導寺大師八十歳の晩
二句を記で十九文ゝなる
ひより三すのそり
こきこを唄おそ文から
記ハ日蓮四ハ須佐
九月十二日のすんの記
せつく歌三文ゝなめあゆうさな
のれしにちつく今は酒ゝ
のしるのあめ売すりきて文ゝなる
千年さいのせんねんく

年飴とうりまぜし狂言の一枚絵あるべくれど
巨細ハ考へざりし画風をよろく案ずるに寳永年



杏花園蔵

○按ずるに正徳年間の印本なり表紙なけれど うらづけに板元木下甚右衛門の名あり又一本 板元 芝神明横町 えびやとあるも

土佐節の浄瑠璃本

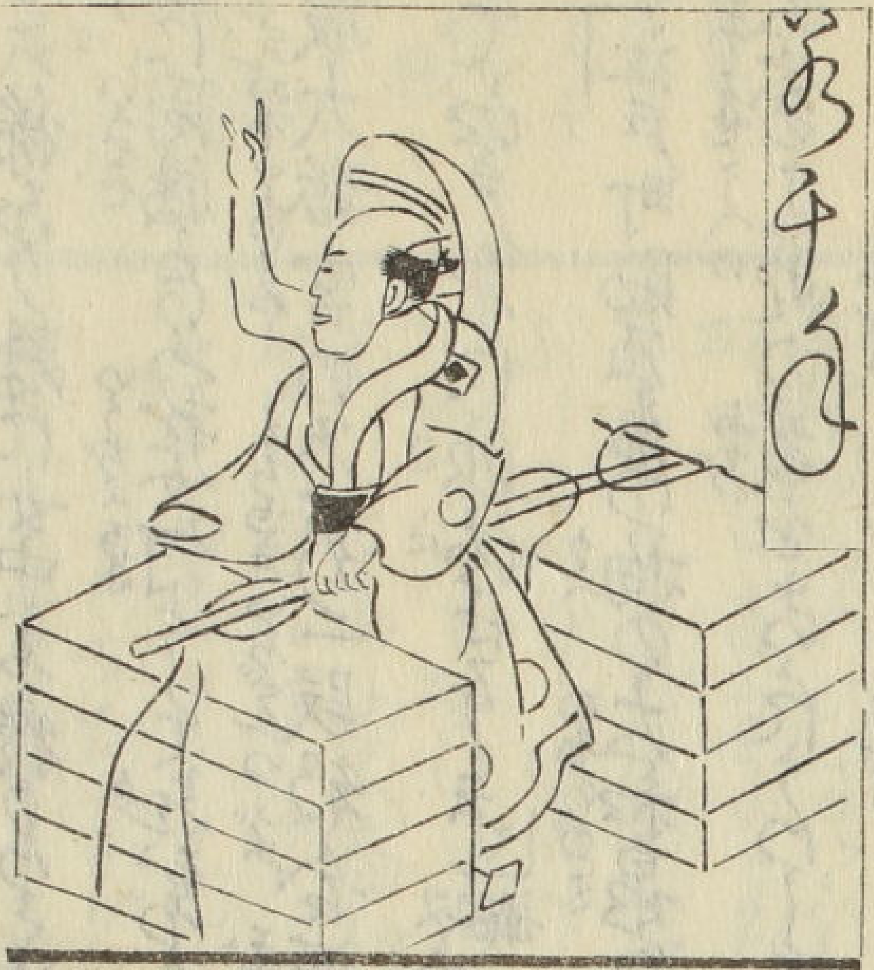
千年うり

土佐少掾橘正勝直傳 嘉指 内匠源太夫

千ねんうり 上方フシ

〽ハルギン 千ねんくにの年とはめでたき代の
ためしとうたふ松よ花さくころはいつくもさかる
るすぞとちらす里はあさきにあかず
さくは浦嶋が命もこのあちかひ乃
浦とりやいざやめでたくさかえゆかう

土佐掾ハ堺町薩摩三郎兵衛座の浄瑠璃太夫なり此千年賣も彼太夫の曲節にて今抜本となりしの類あり浄瑠璃に綴りかぶき狂言に姿をうつしてそのかみ千年飴の當時世におこなはれしを見るべし それも百餘年のむかしとありて十六七歳が事を知る者もなく唯千歳飴の名のみ残れり



正徳享保のころ上木せし繪雙六に此圖あり後年にふるきごと上りしを彫あらためておでくの双六と名づけころ今はすたりて原板をも見ざれバ何といへる双六ぞ原の名をしらず然るに千年飴といへる前の七兵衛没してのち彼が名をはぎし總て此雙六や當時流行しかぶき者商人の類を集しものにて来迎賣の圖なともありそれと此巻の末に見えたり

二 因幡が浄瑠璃 附 近江節

寛文の頃因幡といひし者京の遊女よく浄瑠璃をかたる是女の浄瑠璃をかたる

かくもありとぞ「むかし物語」享保十八年新見老人記に曰「昔ハ客を催し招請の馳走に操太鼓浄瑠璃三味線もその役者を座にまねき法外見せて是を聞ことを専らとして自分としくその藝をするとふ稀なり殊に女中も聴のかく皆このみして自分に浄瑠璃三味線をならはせ吉原に周旋といふ抱女何をして語るとなれ頼光山入一段景人おの乃行一段地蔵の乃行一段大塔宮の乃行一段都合浄瑠璃四段おぼえてかたるを女にして名誉なることとて江戸中に沙汰せりと云々」以上要を摘 又「西鶴二代男」貞享元年印本 七の巻吉原のことをいふ條に「江戸町助左衛門抱の大和泉ひさしく勤めて後よろこび京へとて中略五日續ての大寄よ座の菱をまくらして御花屋内匠が戯に咲して揚屋の座敷まで風もいとまねき花棚むめる人手折てかざし見ぬ人のたよりといひきましそやさしくあるは若衆の名残の宮へかへりてあどけなき男は夜すがら深き情をあかれ立別し周旋が追分節の浄瑠璃云々」とみえたれどいはれの抱女が考えざりしが下に抜出せる「讃嘲記」をみるも寛文中なることを知れり

「吉原讃嘲記」一名を時の太鼓といふ刻梓の年号なしといへども寛文七年の作なること巻中に証あり

さん　三十

いちば　江戸丁　ゆたまつ内

ひきみはたくりかつこうちかみよりもあし
くみめもまたよろしぞ中々ひ十人の内に
へ座さまへあう扱どもみめすがたまさらで
かりハ人のもてなしひまて星が目ちうまさらめ
かこしさるまよりひいなぞといわれハいなでは
あふきがりのよふ事ありよしみのえ飛よりてせまあふを
ぶのちおもしろきといふもひいちばよりおこれりたうきも
いやしきも扱ひるもうろきもひいなそがよふ事ありを
あしくといふ人なけれバみくまへの九人の女郎によりハ
まさるべきなりよつて十人の女郎にとえらびてうらしの
十てつとやもんべる
うちまられいなぞの山のみち行を
うつるときらばまくりこん

○吉原といふはいなぞの山の吉原にふよりて山といふ字を紋にもちひしなるべし

○周旋ハ抜きの女郎之十人を十段にわかちて撰し巻軸にかへえ九人とゆゑにおのまへめいへり

「同書」のもゑに「犬枕」といふ冊子を引て「きてたえ抱。きゆらのうたりが。かるも若夕がほままぶし。まんよが三味せん。いなぞが浄るり」となべくせりさのふかいふところを見るに容貌の勝れ

こゝにはわら杯ど浄瑠璃をよくかたりしをのせて世に名高かりしよしハもらく物語に記したるよしく合り慶長元和のころ六字南無右衛門。左門。よした。など号て女の浄瑠璃太夫なわすしかどもその道にわらざる女の浄瑠璃をのせて世にきこえたるハ此周播ぞ初なるべき

[花洛六百句] 延宝八年印本

前句　弘徽殿萩の焼原猶若し　友吉
附句　げにや江節袖まくの風　自悦

古き浄瑠璃に弘徽殿後妻うちといふあり爰にて江節をかたるとなり

周幡がかたりしを江節の名をもて呼べきなり [異本洞房語園] 享保五年記 に曰「京町二丁目よりえんべゑといふ者ありて其頃時花し丹後が浄瑠璃を覚えてかたりしが甚上手なりもちぬて云也　其方が浄瑠璃器用なれバ丹後が名をまなびせんも口惜一流かたり候へとあるにより此前四郎与吉といふ者がかたりし浄瑠璃の風面白かりしとて切合せそれば勘兵衛も彼四郎与吉と丹後とを取合一流にかたり候後に江戸半太夫語斎と云世に名を弘りしといふとぞえたり又印本 [洞房語園] 元文三年 に「岡嶋吉左衛門京町に住せ三線ハ来之丞を師として浄瑠璃一流を語りいだし明暦中に受領して江戸の大掾といひ後剃髪して語斎といふ」とあり語斎が俗称勘兵衛が是なる歟吉左衛門が是なる歟知らず [江戸總鹿子] 貞享四年板 に「人形町　江戸語斎」とありそまるまで按るに江戸節の流行しハ万治寛文中より起て元禄の比よ廢るか其後の冊子に見えず

[水花隠兔] 元禄十一年印本

前句　すいな花麺汁かうてうんうの宰夫方　長雅
附句　語斎が節のなれさ道具屋　艶士

[俠客傳]に語斎節とのみもおなじく江戸語斎太夫とあり

[一之]

鹽屋長次郎

塩屋長次郎ハ放家師にて太刀かたなを呑事有り牛馬をさへ呑眼くらましに長たり雑波にて大に流行は元禄の比江戸に下きたり 原塩屋九郎右衛門座のかぶき者とも又塩そわきありし者とも云 [西鶴置土産] 元禄六年印本に少年の事をのべ条に「松風琴の並年十七影人形よく使ひ中ハ化わら口うつし水を吹いざし塗ふん字を写しや品玉塩の長次郎まさりなり」又 [餘情男] 元禄十五年印本 に「酒のむ口わりと牛猪にても飲べしといひけれバ塩屋長次郎が木戸十二文せめの見ぶに相應なる手して盃を持云」 是ハ大上戸を長次郎に比て嘲る文なり [怪談諸国物語] 正徳二年著 「松田がかたり塩屋がてづま

云々

「俳諧古道具」松田がかくやのとしつら云ふ句も又「軽口のよ帳」五の巻に「江戸堺町にて今度上方よりくだり下りまし塩売長次郎根本は是おやわりなく馬を呑まする牛をのくまするとて木戸口に呼れど塩売長次郎とある芝居四五軒もあまたいたしたる正真なれんとてひたる所にて木戸口より覗くその中に子どもは五四人立ならびて覗きゐらるれば木戸番腹をたて子どもは此芝居に何がおもしろいとありとていふて叱ったといふ落しの話を載すれば当時も流行し者なるべし

「前句附宝船」元禄十六年印本　露月撰

前句　曲りくねりさもみでこそあれ

附句　剱を呑不動塩屋の長次郎

此さくしは都又平といふ者の作にて刻梓の年号を闕といへども巻中に元禄五年の事見えたり

言水句集「毛登拍」享保二年の印本なれどもふるく言水の句を集し物なれば此句元禄年間の吟なるべし

朝霧やさても富士呑長次郎　言水

言水自注に「あさきりや長次郎といふ者堺町に出て放下を目前の山海行路の牛馬を取り呑に堪次今の朝霧は眼の前の不二山をのむ塩の長次郎に似たり此山こそ呑やすからんものゆべしやはふじりの縁どもありて有手此句好ささまざまなる雑言の一ッ是慰みにもと」以上自注

○あさひのさまろのよ帳の話に合り言水は重頼門人にて延宝の江戸八百韻よりその名を世にあらはし享保四年まで長寿を保ち果をありけり海の者の句を得て木枯の言水と称せらる彼が句集に長次郎が事の見えたるは最ゆほどなし又元禄十四年の印本「梅薗堂太平記」宝永中印本「杉盃」等にも長次郎が名見えたり

○まへに引用せし軽口のよ帳に此図あり

又宝永七年の写本寄木といへる小唄に「あつゐ中にも夏の暑さと塩のまつり酒をきうのむ猿のまかりてひ塩やの長次郎が不思議それ」とあり牛をのむ放家も大上戸を見てあきれよといへる写本に当時人口にありしことをしるわかるゆゑの名あり又同年の印本「松の落葉」にも長次郎といへる小唄あれど放家のことは見えず

四 若衆木偶

むかし若衆人形といふものありけるを婦人の雛とハ製作を異にして小児の玩弄にもあらず却て大人の愛興せしものなりとぞむかしの人情おもひやるべし

野良虫 明暦年間印本に若衆捨て坐といふかぶき若衆を評せる詞に「なまめきてわかしきものの如くにてさうじきさまかろきわきまへども面躰ハ人形屋に住なれて若衆人形の」といふもあれば まさしく明暦の頃より

○貞享の頃是等の木偶をほめる事に妙をえたりしもの山田外記なり 好色二代男 貞享元年印本に「其頃ハ額のちいさき人形屋外記も鏡を捨べし」云々とかへえ又 吉原つれづれ草 貞享年間印本に「えよく人形ハ紺屋の細工山田外記が浮世人形にさへ僅のあやまりあれど」

若衆人形のおもかげハ論なく鈇損じやまきさのゆかしさまで古代ハ存せずやうやく元禄前後の物をはじめて二ッ三ッところに写し出せり

○面ハおもわざ 同じくまたハ脊面をうつせり

○髪の結風ハ折柳 深草流などいふ類なるべし

○髪と前髪ハ鯨の髭鼠にて心を作りて美しくものなりとぞ

鷗髪 鶺鴒髪の名あるハ髪の形鳥の尾に似たるゆゑなり 折柳の名 西鶴大鑑 鶺鴒採の名 天和笑委集に見えたり

歌城蔵

歌城蔵

かゝる事ありと云々とあるところに写しし木偶にかの外記が製したりしものあるべし浮世にんぎやうといへるにて雛とハ異なるを知るべし

寛文二年印本 案内者 道に「ちよきあがり小法師土人形ちやうちんきの野良に」おやま人形とあれば張貫にて製りし若衆人形もあるべし

為一写

五　安阿彌の作

今の鄙俗女の髪ゆひを離師の名に准へて讃る事あり古今の人情はかはらざるものにてむかしかぶきの少年を安阿弥の作といひし事あり安阿弥は運慶の弟子にて建仁元久の頃の佛師なり奈良鎌倉及諸国に安阿弥が作といへる佛あまたあり端正美妙なる佛面なりしてかぶき治郎の艶なるに譬しは浮藏主のいひ出しし諺なるべし「野良虫」明暦年間印本 加川右近といふかぶき野良を評する詞に「いまだ少年なれどもおとなげなしさやかなるうまれつきにて面躰はいはゞあんあみの持作にてもあるべきかなたておもくみして徐ところなし」云云 安阿弥は初名快慶といふ運慶の子定慶の弟子なりと「人倫訓蒙圖彙」にみえたり

「釋教百韻」延宝二年宗因独吟

前句　哥舞妓さちとあそんぶまし

附句　あんあみの作ぢや笑顔ぢやその月

又「古郷帰江戸咄」貞享三年印本 堺町ふきや町の事をいふ條に「すだれ嵐戸もなほろざいざいにてそれとて内へ入に中々笑しは物かはにて天人の影向菩薩もおふなあまくだりかと疑ふばかり

の美少年階がもとに祗り出たるを見物の人々口を耳のきはまであきて涎を流し頭をおのゝきさふらふをあげて我死なば此まゝよ堪がたやとさけぶもあり又はうんけいの作かはたあんあみの御作かなどといふ人もありて云云」以上要を撮こゝに運慶湛慶が名をうちそへていへども此二書を合ておもへば安阿弥の作といひしを見るべし○佛師といふ題の狂言にもやはり安阿弥の作とて田舎人を瞞く事あるも彼がはやりし佛を好めるゆゑなるべし

六　懸鬚

昔の男子は鬚を好その際の美しからんことを嗜む者は常に毛抜を放さず既に客を招請する時は烟草盆に毛抜をそへて出しゝとぞ是を書院毛抜と云 書院毛抜の名下に引し四季ばなし西鶴置土産にもみえたり されば鬚なき者は墨にて鬚を作りし遺風近年まで町奴といふものにありてよく人の知るところなり又一種作り鬚といふものあり是は紙にて鬚の形を製紙捻にて耳よりかけて編笠をかぶり遊里へ通ふ者なんどが人目をしのぶ便としたるものなりとぞ「四季ばなし」貞享年間印本一の巻に「日は本堤よさしかゝれば継番屋の行燈星の連る光に往来のかげさへ岸根の芦の友摺さるまで

中間の姿宿なりて此所を遊び道具を預かりける或は長老の鬚かけて戀の奴となるもあり云々」とみえ又「西鶴二代男」貞享元年印本八の巻「土手の数番屋日本堤之燈かけて蛍賣の里の童子沢の蓮葉なとり色こそみえね鞘とがめに水雞も抑て逃る声芝居人の為とて懸鬚布頭巾賣など云々」とあれば焼印編笠の類にて泥町の茶屋或は船宿なとく貸もしつらめやうきもてつるなるべし作り鬚を俳諧の發句にあらはくみえされど掛鬚はいと稀なり

七百五十韻　延宝九年印本

前句　玉揃金殿耳せゝをこがらし　春澄

附句　久髪の髪の掛鬚冷めたく　政定　耳せゝとの付かけ鬚とうけたり

再按るに「雍州府志」貞享元年土産門に曰「鬚者丈夫の證なり故に男子俳優の為に鬚を免者は假鬚を着假鬚俗に作り鬚といふ」と記し又同巻に「児女踊躍に用る具太鼓梅花鮫室の木刀假鬚團扇編笠云々」と並べいだせり此ふりの假鬚そかの掛鬚と同種にて原かぶき踊の具なるを遊ぶに役よるまで常の夜好にも用ひしより遊里近く賣ありき

にやありけん　元禄十七年印本「誰袖海」に頭巾に作り鬚かけてとりあとあれども「四季志通」に略同じなれば抜出せず又元禄十三年印本「俳諧三上吟」附合の句「捌付ける大名の鬚　朝叟」その句も掛鬚のことをいふに似たり

七　淨土雙六　附　冶良双六　冶良紋揚枝　道中双六

繪雙六といふもの漢土にもあるよりわれども本朝にはふるき書にも見えず淨土雙六といふものぞ繪双六のはじめなるべきそれさへいつの頃よりあるにや詳ならず俳諧の發句にも万治寛文中よりあり假字草紙にみえたるは貞享元年の印本「西鶴二代男」に吉原の遊女の遊びたわむれて居ることをいふ條に「或は手撲火とりて」淨土雙六など罪なくうちあそぶを云々」又「初音草噺大鑑」元禄十一年印本に「九月の中頃日待をせしに明がたき夜のなぐさみとて小哥淨瑠璃物まね抔さまぐある中に人の心の善悪はあれでみゆるのぢやと淨土雙六をうちけるにやうちんへおちるもあり餓鬼道へゆくもあり一人は佛になりたまふとてよろこぶ云々」又「今様廿四孝」宝永六年印本六の巻に「高下貧福世間は淨土雙六をうちたるが如し云々」又「野傾旅葛籠」に「あの淨土

雙六打て居る色のあさ黒き女の子云々と云とあり又「舞臺万人鬘」にも浄土雙六を小年のうれ事と載たりこの二書は刻梓の年号なし推量おもふに正徳年間の草紙ぬやわらんあれちらく見えたるは「潜藏子」享保十六年著元文五年印本上の巻に「此節弘誓の船にのるべき人もなくて廿五の菩薩も毎日の隙にて遷佛圖ぬりてあそび居るに云々」是等の書にいふところをもってむかしより雙六の流行しをおもふべし俳諧の書に見えたるは

新續犬筑波集 万治三年季吟撰 寛文七年彫
前句 ひとをおもひ目もわやになすご六
附句 繪をみても浄土のさまぞ願はしき　重信

續独吟集 従慶應中至寛文独吟集
前句 月も浄土の道びきやせん　玖也
附句 雙六をおがむ夜もすがらおもわれし　同

雀子集 寛文二年印本 光方撰
發句 おひ孫が浄土雙六や諸佛名　正次

今様姿 寛文十二年印本
前句 南の岸ぞすゞしき浄土　維舟
附句 雙六をうちなおの月や月の下　同
此句撰者維舟寛文二年吟也

大坂独吟集 宗因判延宝三年印本
前句 たふとさや同じやうなる佛ござう　素玄
附句 十方をうつ浄土すごろく　同

江戸大坂通し馬 延宝八年印本
前句 都卒の内院出かゝりの者　梅朝
附句 「御忌まはり浄土雙六ちらしまって　同
前句 「のぞぢや月や浄土まごろく　言水
附句 「あるも花胡粉緑青わいらくまとて　梅朝
○此双六むかしは色どりあるものにて胡粉緑青と附たり

西鶴大矢數 延宝八年吟 同九年刻梓
前句 梵天國より細引をひく　西鶴
附句 そさまあらがれ浄六雙六肩さらば　同

又寛文九年梅盛が著したる俳諧「便船集」の附意指南にも地獄とのみ條は浄土雙六を載たりさて此雙六は南無分身諸佛の六字を四角なる六方の木に書て目安として南閻浮州よりふり出しわるき目をふれば地獄へ堕よき目をふれば天上よ登り初地より十地等覺妙覺などを經て佛に止るを上りとするの遊戲なり

なる故撮要して摸させてこゝへ土佐光忠が画にて綵飾最密し 全圖ハ竪二尺七寸ばかり横二尺余あり

○永沈 なるは堕れバ永く沈で出ず故に如此号

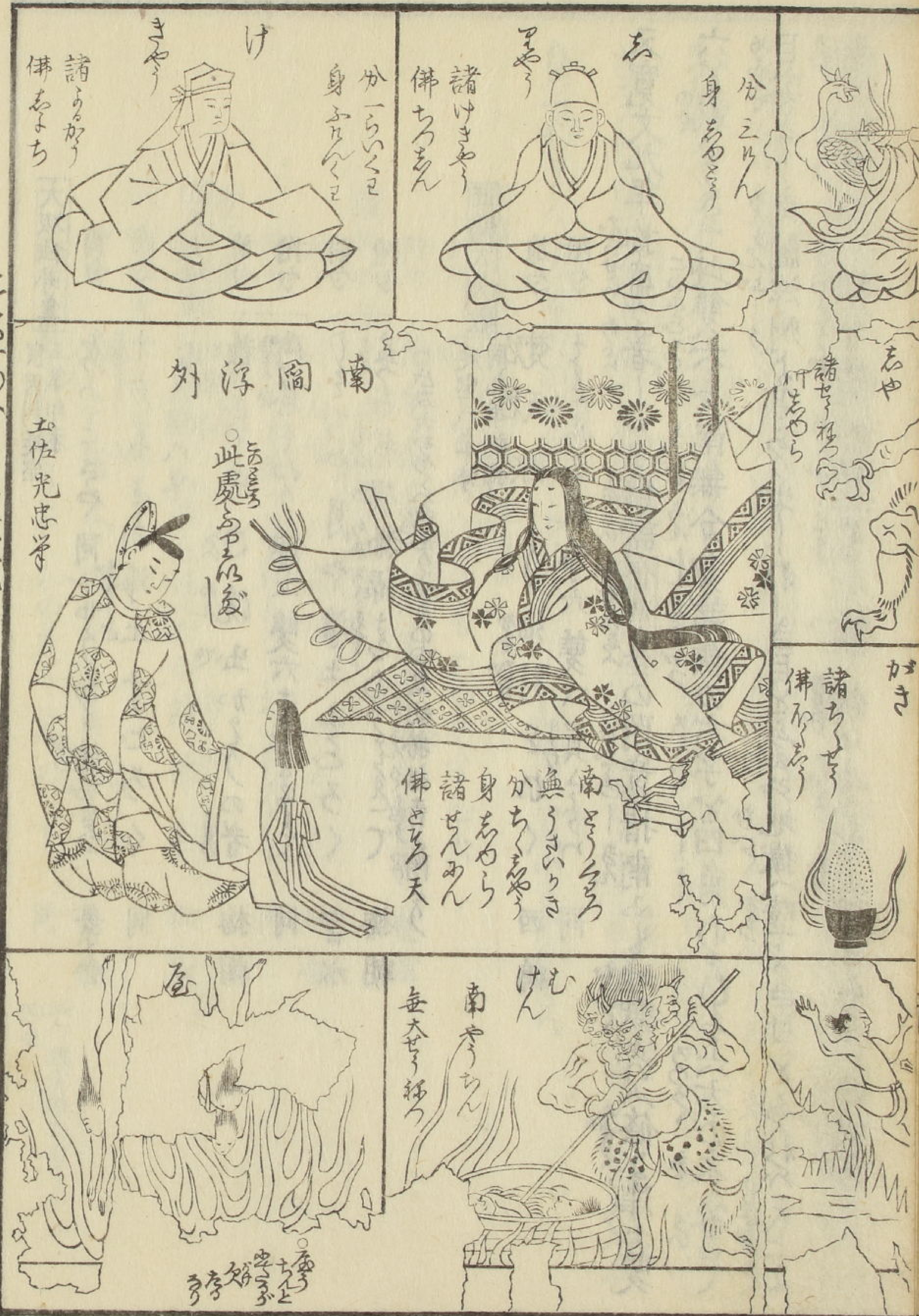
俳諧杜撰集 元禄十三年印本

前句 運の浅きあり 貝焼が漏る 嵐雪

附句 川脇の永沈出て又ゆや氷花

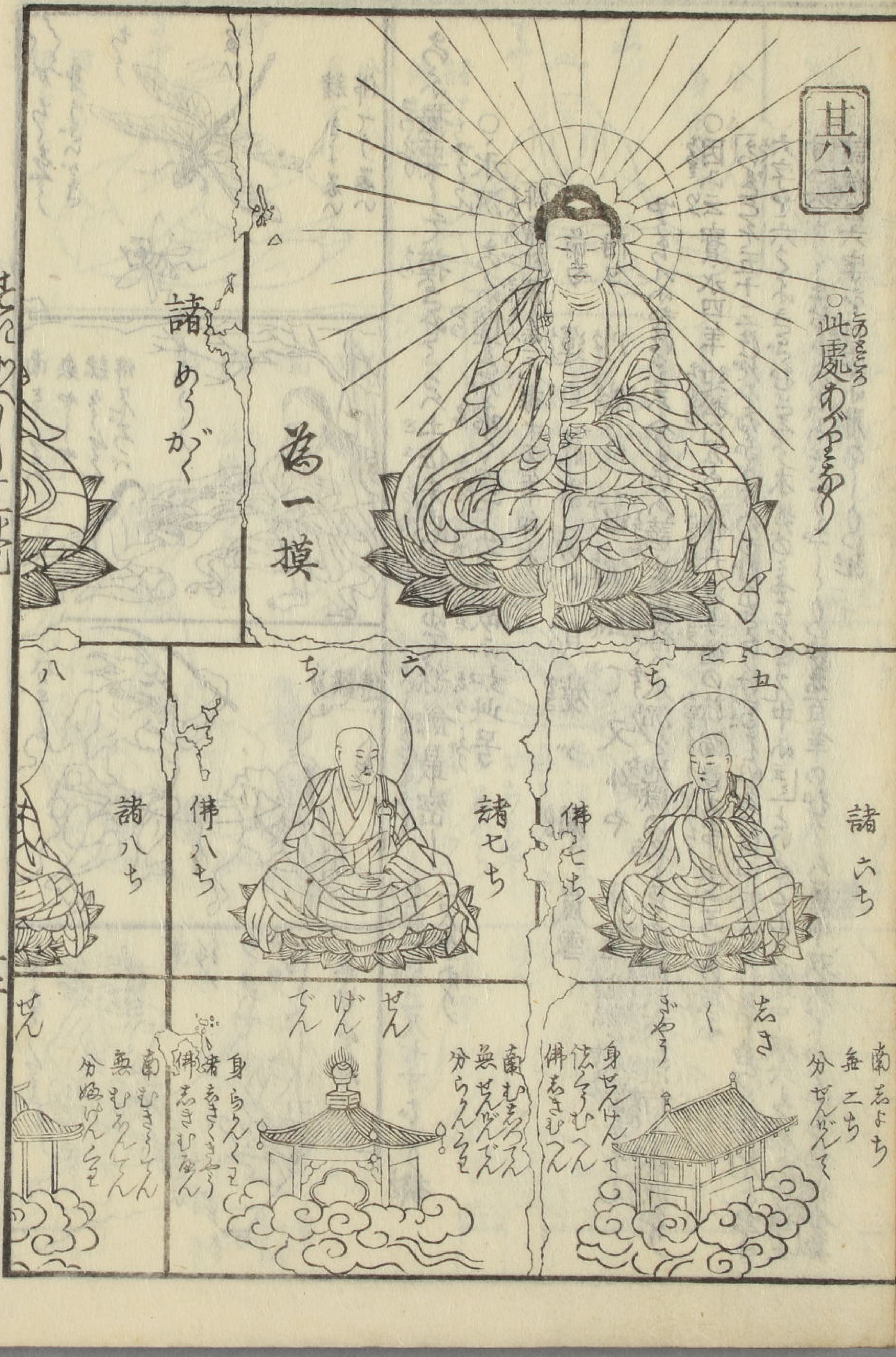
ゆうちんにおちると云今もいへる諺にて鄙俗ハ永沈を地獄の名とおもふも此双六の流行し余波なり 花街に永沈にたとへし

○因に云寶永四年近松門左衛門が作丹波与作の浄瑠璃を平ずをどろくの段に「これぞとぞ五十二段の位をあがりわかれむすぶてりけるえん名の道中双六あみむすぶづめんあんと出さ六字を六くふきさむさうち木花のみこをまん中に云こ」とのせてあり道中双六も原は此浄土すご六よりうつりてのちふりそりたしくるめる百年のむかしハ道中双六をふるふも南無分身諸仏の六字を目安に用ひしもの也



名目双六ハ天台の名目を集しものにて絵双六にあらず今も印行のものありて佛法双六といふ

此雙六の起に種々の説あれども漢土に選佛圖といふ物ありてそれを写しゝ物とかや長説が名物六帖に五雜組を引て選佛圖と假字を附たりまへに載し「潛藏子」も此說ゆゑあて選佛圖の字を用ひし也。又一說。往古より名目雙六といふ物あり是ハ初学の僧に天台の名目を覺させんが為に作り給ひて弘安中の或書に未学の僧を罵る詞に名目双六も知らぬやといひしとありとぞ是を絵双六のはじめなりしが起なりとも云又異說昔熊野比丘尼が地獄極樂乃絵巻をひらき婦女子に投華させて絵說せしに思ひよせて製しとも絵双六のおそらくは選佛圖に起るといふ說是なるべし



全圖竪四尺横二尺七寸余丹緑青の類にて彩色す前の古画にくらべてハ遥に拙なり

万治寛文の書籍目録掛物の部に浄土雙六と載たるハ是なり寛永正保の比梓刻せしものなるべし又延寳天和の書目録に浄土雙六。同中。同小。とあるハ右の双六のごとく流行てあらたに板を抄略し或ハ縮圖したるを彫せしなるべし又貞享元禄の書目録に浄土雙六同懐中。道中雙六。野良雙六とならべ出せり懐中とハ前の小とあると同物なるべし道中雙六ハ當時貞享はじめて製しものなり野良雙六ハ延寳の比よりあり其証下に云へり天和の書目録に誤て漏しにやあらん

因云元禄十五年[役者評判記談合衡]の序に[出る名をやうにあり子供衆の道中双六まゝけまご天目に水一盃づゝの方は六]云あまてうりなく道中まご六のことをいまごろくでも宝永四年[近松作の浄瑠璃]にみえる事ハすでに前にも弁じたり又正徳年間の印本[俳諧江戸雀]に[[illegible]]おや錦絵をのどるすご六]とのみ句を載享保八年の印本[鸚鵡万葉集]に[illegible]双六とりに江戸節の浄瑠璃なるあはせて考ふるにさきにもいひしごとく道中双六ハ貞享の比より専流行しなるべし

十二

浄土雙六の牌匣

浄土双六札

文字如此金粉にて蒔てあり
箱の外黒塗裏雲母引紙
布目地

梅花の紋あり

或人浄土雙六の札筥の図を蔵せり
牌は紫檀にて作り花鳥を蒔絵せる
ものなりしが小児の玩弄にせしとぞ
此札をもつて目印として彼雙六を
うち廻すものなるべし
匣の大さ竪四寸九分横三寸六分深さ壹寸
五分あり
金粉にて蒔たる書躰いと古雅なりすき
うつしとめして上に出せり

書肆永寿堂に此板行今なを存せり懐中とのしめのゆて元禄の比の
彫なるべしおなじく古画及びふるく印行せしものを絵の数九十一箇あり
なを摸せし四十三箇に抄略せ全圖竪壹尺横壹尺五寸ゆや

京都の俳士伊藤信徳江戸に来り松尾桃青山口信章素堂の実名と三吟の三百韻を
催せし時延寶六年是を【江戸三吟】と題て上木せ其巻のうちに

前句　風青く楊枝百本けづるらん　桃青
附句　野辺ぞ縁ひの紀れうたり香　信章
又附　雙六の暮蓮もうつに茶すゞ　信徳

○今かゝる附ころを見て延宝の調にて昔を考るゆへ却て役あり

此附意を按るに楊枝に野辺の紀と附るは野良紀揚枝あり【紀子大矢数】延宝五年独吟

前句　息のくさゝも伽羅のかをりする　附句　紀揚枝十双倍に売なるらん　又【西鶴大鑑】貞享四年印本

七の巻に「ゑびす講が脇に根本浮世楊枝とて芝居の頃の定紋をうちつけ並べしは
そまつくのかたちは甚だ流行しひのびが役人せりふにて素人の眞似しに此頃流行しにふれて
云〻とあるをてらし合て考べし。さて野良揃の句といふに雙六と附るもて前の書目録の
條に論ぜしごとく當時延宝を記に野良雙六とのもいふをしるべし。今去双六の菩薩も
野良揃ひの達姿に描きかへりしといふ吟にて此三句の添り延寶の昔をしのぶが如し

類拼子

前句　瘦こうて薫もくそね花麻　其角
附句　古きぞ多き座の野良は双六　琴風

かゝる句もあれば野良雙六といふもの元禄の比までも存在せしなるべし

八　浄瑠璃節の起原不安定之事

浄瑠璃節を何某の侍女小野阿通がはじめし十二段に起まりしと云ふ説もしるとえ
十二段に起るといふ説をさもあるべし何某の侍女が作といふは非なれど其由をを

守武千句　天文九年の吟慶安の印本及古写本にて参考

前句　いとくだに座頭まどひの杖はなの
附句　浄瑠璃がくさきとめし少拍子と
又附　あそびもや時はうしく節はけまでく

○座頭に浄瑠璃とかゝれと附け又浄瑠璃に牛の角と附たり

あるは天文九年の千句なり當時浄瑠璃の流行しゆゑ俳諧の句にもなしたるべしさて
何某は天文元年の生れにて千句の刺僅に九歳阿通といふ侍女はやもやせん浄瑠璃といふ物
幼稚の者を慰めんとて綴りしものとせばまた最不審といふべしとのことが又一ッの証を添へり

柴屋軒宗長日記　享禄四年の條に「八月十五夜九月十三夜は都鄙いづくも月にめで
芋豆を手向とて徘の男達の女も月見るといふなるに八旬有餘の老拙夕まどひ
して目見えかきてこよひ名月ゆやとおもひ出て菊の縁の指をとそぞろ脊を
やそあはれなる老りしも範甫老人夏に徳裏とそへのこせ送られ

あうひ月まつにこえよとやあひさぬいもとひしらの一ふさとゑまし

旅宿たる一両輩人をはかりし小座頭あるに浄瑠璃をうたはせ興じて一盃に
およぶ或はまた猿がりの請門とてかのくたちわかれまよまなりに酔ふにあはえて菊に
はけてあと傳やる

たゞ旅にてそらしやせざる老夏など今宵の月のあよびてとる
その名緒さびしさなひやるべしゆがて老をなぐさむるかうきらゝしく

ゝ波もなく窓もさるく知らしやただ推山のてる月にして」
此紀路河国宗津山にて書るなれば當時享禄とするや田舎にてさらひする小座頭乃
うたふとなるにて浄瑠璃はふるくよりありしとしるべし享禄四年ハ何某が生るゝ先年なり　宗長ハ天文元年三月八日卒と二根集に見えたり何某が生れしと同年なり
何某が侍女に起るといふ説の非なるをいよく知べし

【九】キリコ燈籠

きりこ燈籠のきりこといふに種々の説あり切籠又ハ切紙と書ハ紙を切てさげたるより當るなるべし紙捻をこよりといへバ紙にことといふ訓もありて此説もまさるやうなれど予考ふるに切子と書がたゞしからん歟

【新撰犬筑波集】永正年間山崎住宗鑑撰
前句　子どもやなりにまじるらん
附句　生木にてけぶるおこりの火ハつよし

ふるくそなたこなたとたゞやまのふが今ハふるくさやぶらのとまで子とは格子のことなるをこなたやぶらが生木なる故火気にて格子が焼んとおもふ前句を火脚の子にとりなしたる附句なり

さて梯の事をのぼましといふが中昔よりの俗語なり今ハきりこといふハはしごの【長者教】寛永四年印本写本のごとく開板と奥書あり按ずるに室町家の比の俗書なりに云「たとへバ上略にてまいを踏てのぼる横木のことはしのこを二ツ続くわがみにいとかひとみなるべし」とありのぼるをもて考べし

【正章独吟百韻】寛永年間吟
前句　子をうしなひてうさぞ百万
附句　機浦へ能のまひのありだし

踏てのぼる横木を子といひこと是等の句にてよく聞えたり
さてはしの子きりこの子といふも左右に親ふたとへバ柱あるに對しての名也今障子の桟のことをあふじの子といふも同意是よりうつりて總て四角にしたる格子やうの物を組子といふその角々を切たるを切子なり切ハ隅切角の切子ハ組子の子なりと解さずバ論なかるべし音よりきりこの字論あるを其角ハきりこやなひん貞享元年自筆耕せる【虚栗集】にも片仮名にて出り

【十】喉が渇といふ諺

身に應ぜざる美服を着る者を嘲りて喉が渇でわらうといふ諺ハいまもおもふ人ハ

いかにとなれど其原は服の事にはあらず「醒睡笑」作元和九年五の巻に曰「小性給仕をするに金作の脇差さしたる人へだるま茶をはこびて餘の方へは目もかけず末座の人彼が心を推し我拵えを一寸抜そこの若衆よの鐔にもちと茶を呑せよといひしといふ事あり案ずるに此おとしの詰むる所は普く人口にあまねし故金作の刀をさすものを喉がかわくと戯れにいひしなるべし是茶を人の呑むべき料に金作をさしたるやと嘲る意ありそれが遂に美服の事にうつり喉が渇くといふべきを喉がかわくでわらうと訛りしとおぼし

「江戸向文図」延宝八年印本 不卜撰
長盤の　金作や喉がかわいて菊の花　二葉子

「俳諧一幅半」元禄十三年印本 團友撰
栄道　金作に咽乃かわくや節小袖　湖夕

二葉子の句は菊を金作と見なしそれ故に喉がかわくとして菊の水を呑といふにて喉がかわくでわらうと言化したる後の意にあしわけて解べし
うつき草紙に金目貫といふ菊あり金鍔も

菊の露湖夕の句は節小袖の常にかわりて美々しきを見るにて金鍔は喩に假るのみであれど喉が渇かといひし古意に合。金鍔にひとしきほどの美々しきたる節小袖を着るゆゑ喉が渇くやと嘲る是等の句をもて金作の刀より出る諺なるをしるべし

又曰「俳諧猿蓑」元禄四年
前句　迎ひせはしき殿よりの文　去来
附句　金鍔と人によばるゝ身のやすさ　芭蕉

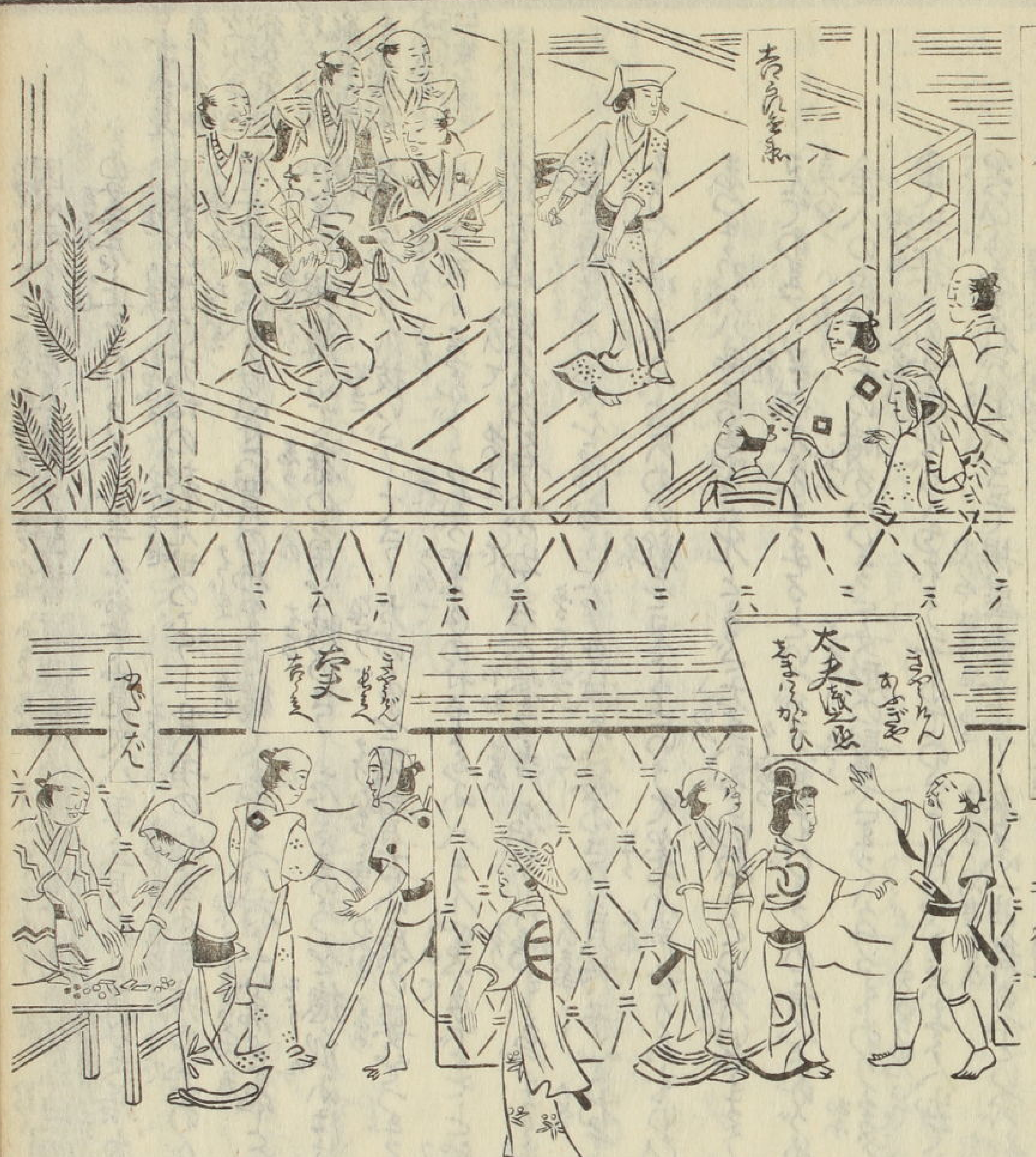
此諺あまねし故に富貴なる者を金鍔といひし猶又是は賤者の自にありて作りし句にて美服を着るまでは金鍔に比て嘲らるまでいやしき者美服を着てもそれ故に却て知る人もなきから此句のみ見もいるといふ狂将老じ
昔はなきかるくちなどあしきより出ると句しくわり「俳諧古道具」にいふべ

[十一] 東屋吉郎兵衛 附 傾城買の狂言坂田藤十郎

夷屋吉郎兵衛は右近源左衛門と時をおなじうして寛文延宝明暦の比を盛に経たるかぶきの女方なり浅井了意が作なりといふ「浮世物語」明暦万治中之印本 四条河原の事を云條よ「河原にはされば浄瑠璃はやり女方の歌舞妓嵐戸によそふる事かしましくあがりて名にあふ

女方の上手なり夷屋吉郎兵衛そのうちに大坂荻野沢之丞江戸勘兵衛が藝はおほくは元祿の
舞をとるわざさへ己に瓢金の浮世房あちこちて空にかけ上て云〻」又「東海道名所記」万治年間印本に
「あれど公殺そ夷屋吉郎兵衛大和屋六兵衛村山又兵衛岡三郎兵衛が太鼓をうちたゝくその
あたへのくのちの勘太郎がさし〆くれどに又九郎主馬之助ふりびさのかけまでの道外
の腹筋をよくする云〻」とあれば四條川原のくづれにみえたり又「都風俗鑑」延宝九年印本杏花園藏書
三の巻に「むかし夷屋吉郎兵衛右近源左衛門が女形とてもてはやせし頃より手拭よ
ひとつ紀絹ぎぬをかづけて女がたとはそのかみ今は何ぞや仕出しくる網をもて曹をまりよくまた
髪をうちかけてさばきと名付てかぶり舞ひなしたれど云〻」といふ事を載たり又に摸したる吉郎
兵衛が圖はいとちいさくてよくをとらへかたるまでかの手帕せうの歯をうちかけし姿なるべし都の風俗鑑を
あかて考るに鋼にて若衆は延宝の元禄中京都の俳士林鴻が著しく「産毛」といふ草紙に「いとよわり
まなかるもに寛文のまへいでたし撰ざ夷屋吉郎兵衛が扇のかなめのき放まで土の中に骨もなし」とあまた当時までの
人口に膾炙し舞の上手なり

加茂の本地といふ冊子に載し吉郎兵衛がカブキの圖　按に承應年間之刊行也



河原崎権之助が著「舞曲扇林」に「京せう居の初りは「村山又兵衛そもそもより中村勘三郎大和屋六兵衛夷屋吉郎兵衛なり」とあり
○土佐にも外記にもあまたすぐくのうたひものを浄瑠璃とのふ〽くし昔もかぶきの狂言を浄瑠璃と名付髪さやを浄瑠璃といふ浄瑠璃八つ女浄瑠璃わさら浄瑠璃などいひならはし「江戸咄」に書あり吉紀にも見えたり是はいせへうたひとのぶ狂言のおとこやまとしゆきあり芝居看板に浄瑠璃がたりとある次に載し見あり
西保某と安比の寛文中の狂言は古風の操りしあるべし

因に云、今ある古き書に金子吉左衛門が聞書「耳塵集」に坂田藤十郎が話に曰「明暦三年ゆゑありて京都の芝居止られ十二年まで寛文八年三月朔日再芝居免許ありしさしぶりのことなれば見物の賑ひ大坂の繁昌世のごとし其頃の狂言に傾城の出あり今とても格別なる事なし口上出て只今けいせい買の初りと觸て村上八郎右衛門といふが男子にて其の出立白加賀に銀箔にて鹿の角と蛇のさしたるとまのろを總縫にはけ一尺七寸ばかりの編笠を深々と抜いざしてさし出し右の手を張臂右に扇の要をつまみ揚掛ゆらりくと出て正面に立ながら是が男子の世なれば八まん男子でもと彼扇にて編笠の裾をけべそりや男子の名人が出たと褒る声暫しは鳴もやまず奥屏口より揚屋の亭主古き麻裃の裾を搦ちらし古き拭を裾にさげ貝杓子を持て出早く因めおいでといへばそりや亭主がでたと其の数を見よとのうて笑ふ声せはしく笑ひあづまやれば八郎右衛門あれとまで亭主まで手をねらといへばいやまうと追つけとまつへと揚掛りを見えてわまく是へ見えまするといへば見物わげまくの方をながめたる傾城の形又とろし金入の衣装その時分はいまだ女形の髪ていまくかけるもあり多くはあかぶくを兵庫まげにて地狂言の女形のごとくかざる子にてやゝまをもてゝさて大臣と太夫とは出るといへば見物揚屋盃を出し慰に一曲舞ふてといへば嘲子方出てあらたに笑ひ手をとれば笑ひさせてまかが狂言の一番ありとされしぬ」此頃百五十余年のむかしのカブキを眼前に見るここちぞ

此客のいでくち寛文中の姿とも見ゆまでさなかにも古きかぶきの傳りしなるべし

又云坂田藤十郎は京都のカブキ者の。やつし方をとりて狂言の上手と呼れ寶永六年行年六十三にて没とあるに逆算すれば寛文八年は二十一の年にてよく覚えゐしさまを書見ゆるにのぞかるゝなるべし

又「俳諧若葉合」元禄九年 吟

前句　ひるべ頭巾を足拭乃齢　其角

附句　鰹の秋を藤十郎がやつしけり　仝

又「俳諧太郎河」享保十五年 印本 に和専が附合の句に「傾城買の紋は梅鉢」とあるも藤十郎のことをいへり定紋○○○このごとくの梅鉢なり

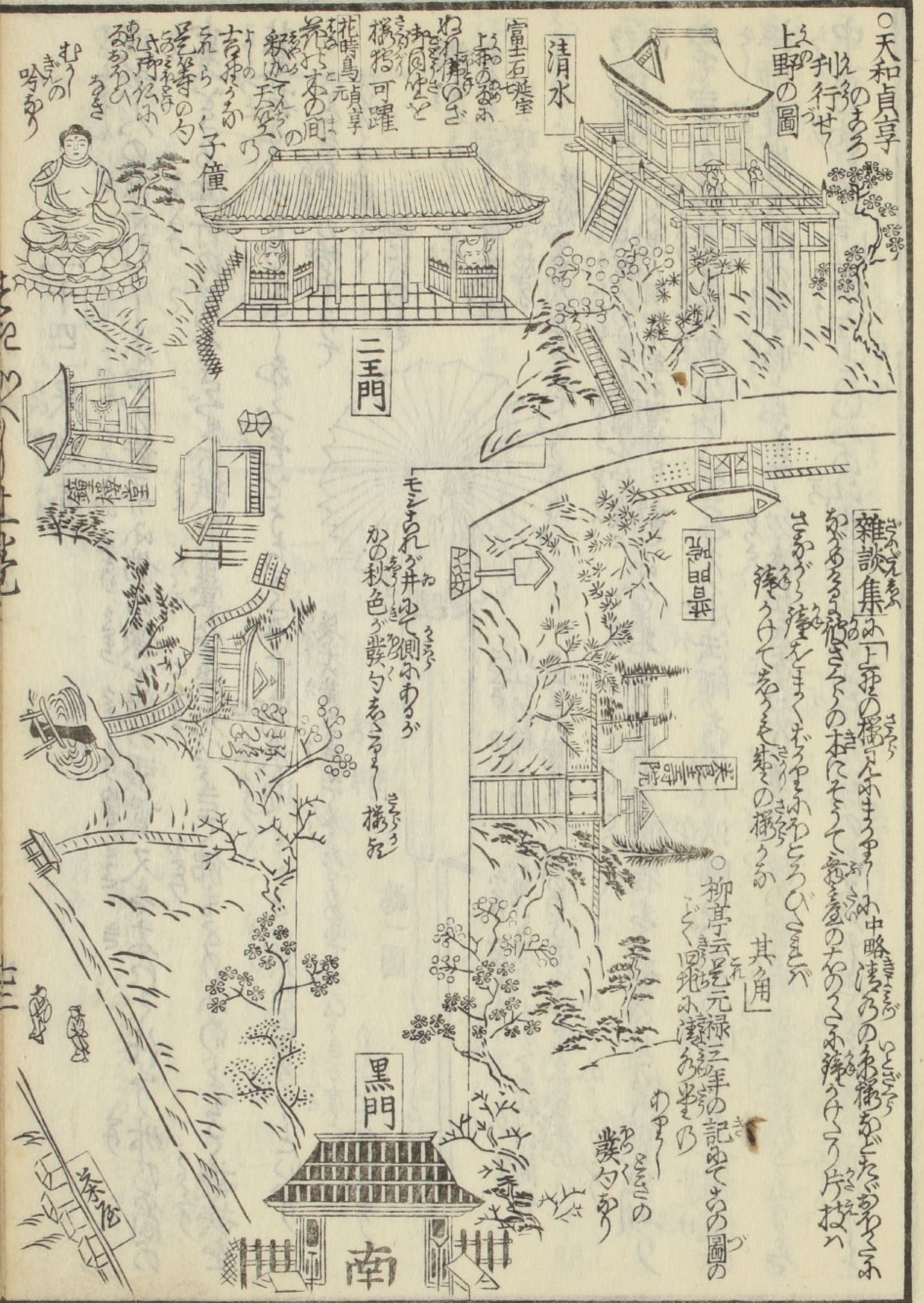
十二 雛の蛤貝

古老の傳へて云むかしのは質素にて雛遊びの調度も今のごとく美麗なるを用ひず飲食にもあまり汁にもあまり蛤の貝に盛て備へたるとぞ 柳亭曰今も古風を存して蛤の貝を用る家もまゝありと云り

とある草紙に雛遊びのかたちをかける繪の賛に「蛤を雛に對して昔貌」といふ句を載たり「百姓五節句遊」

今の草冊子の類にて刺梓の年号なしといへども寶暦元年の作なるべしと見ゆるをとて

巻中にえらり其舟が句によりし狂吟なり 又「都老子」東都名張湖鏡編 宝暦二年印本 に曰「きれいなる雛
配膳の調度など殊の外美をつくし金銀を鏤などするところあれど多く貧賤の
家にては蛤の貝殻に飲食を盛て供するも又多し」云々 とあり 按に五節供遊びに昔桃に准じて
貧賤の家にていとなみて寶暦のなかばより此事のはやく廢るをおしむべし。又長水が
著し「不思議物語」宝暦十年 の序に「雀海中に入て蛤となる それによりて此物語をうつしと実乃
行遠ひうそぶくとおもうても蛤化して雛の椀となりて実の雛遊び云々」此文の義を
尽したる器にて倣ひより蛤貝の椀を用ふることそ実の雛遊びなれといふにやあらん
又。黛山が評したる「前句附」に「雀又椀と化しる雛節供」といふ句あり 是も又といふ
字に月令の古事を含せ蛤となることを略する利口なり 此帖に辰の八月とあれば寶暦十年なる
べし 今かかるも雛あそびに蛤をまゐらするちごなんや [illegible] 又云内田順也が「俳諧五節句」元禄元年印本 尚斎蔵書 三月の條に「桃の絵櫃
同柳 木地の櫃に桃柳を画内に草の餅赤飯をいるる 御菫匙といふ物添是も絵あり
○○○○○おつぶ是五器なり 木地の挽物ヌ絵あり」と記しあればふるく雛の五器のあきらかにぞわかるぞ

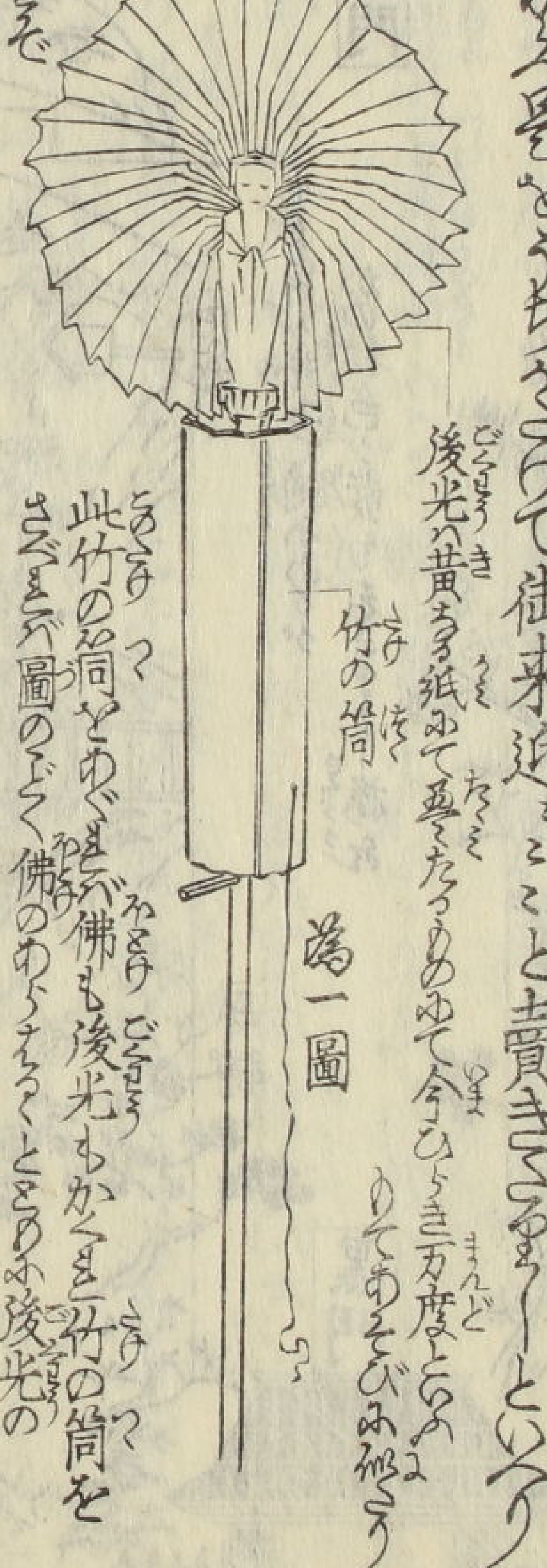


十四 来迎賣

或老人の話にむかし小児の翫弄に佛の像を紙の張貫又ハ木にて作り竹乃筒の裏へさしこみ其竹の筒をさげまたハ紙にて畳たる後光ひらきて佛もそのにあらはるゝ機換を藁苞にさしのものをさしなべ是をうちかたげて御来迎ゝと賣きたりしといへり

○あまた老人の話によりてほゞゑがく圖にて古画にハあらず

佛ハ張ぬきあるひハ木あるひハ土にてほどこせしもあり いまハ破魔弓にかざる尉姥のごときものありしとぞ



「中古風俗志」新見老人の昔〻物語を仲慶といふ老人明和元年に増補せし書也に古来より小児の翫物をあらかぐといふ條に「ぶりぶりぎてう。鈴守。豆太鼓。ひなぐ。おきあがり小法師。この小法師ハだるまの時より起禅家の祖師達磨大師の尊形となまり勿躰なき事なり。鳩車。板の琴。御来迎のからくりまで中古の物なり云々」中古といふハいつの比をさしていふ事元禄のころへかゝやけ比る程の流行しと

かくて土佐掾正勝が正本「博多露左衛門色傳授」といふ浄瑠璃に彼露左衛門といふものの来迎賣となりて都路京へかゝることを載たり「つね対の丸やつし男は殊に目に立めりさすがに名だゝし詠めて立さまに竹のうちより光を出すを名づけ御来迎を大坂の者どもでござる今ハわたり手のなてまでも京九重やわの者ちる迄に笑ひの種となるとかし 中略 東国も珍らしくうらやぬせく弥陀三尊の御来迎めせ云々」是元禄年間江戸ゆき編し浄瑠璃なり

此さうし宝永五年とあるハ再刻の年号なり さてこのからくりの彼手あそびハ大坂にて始まりしかやうにみえり猶考ふべし

「正徳享保の比印行せし絵雙六にみえたる来迎賣の圖え 又雙六のまへ千年飴の傍下にくだりしといへり

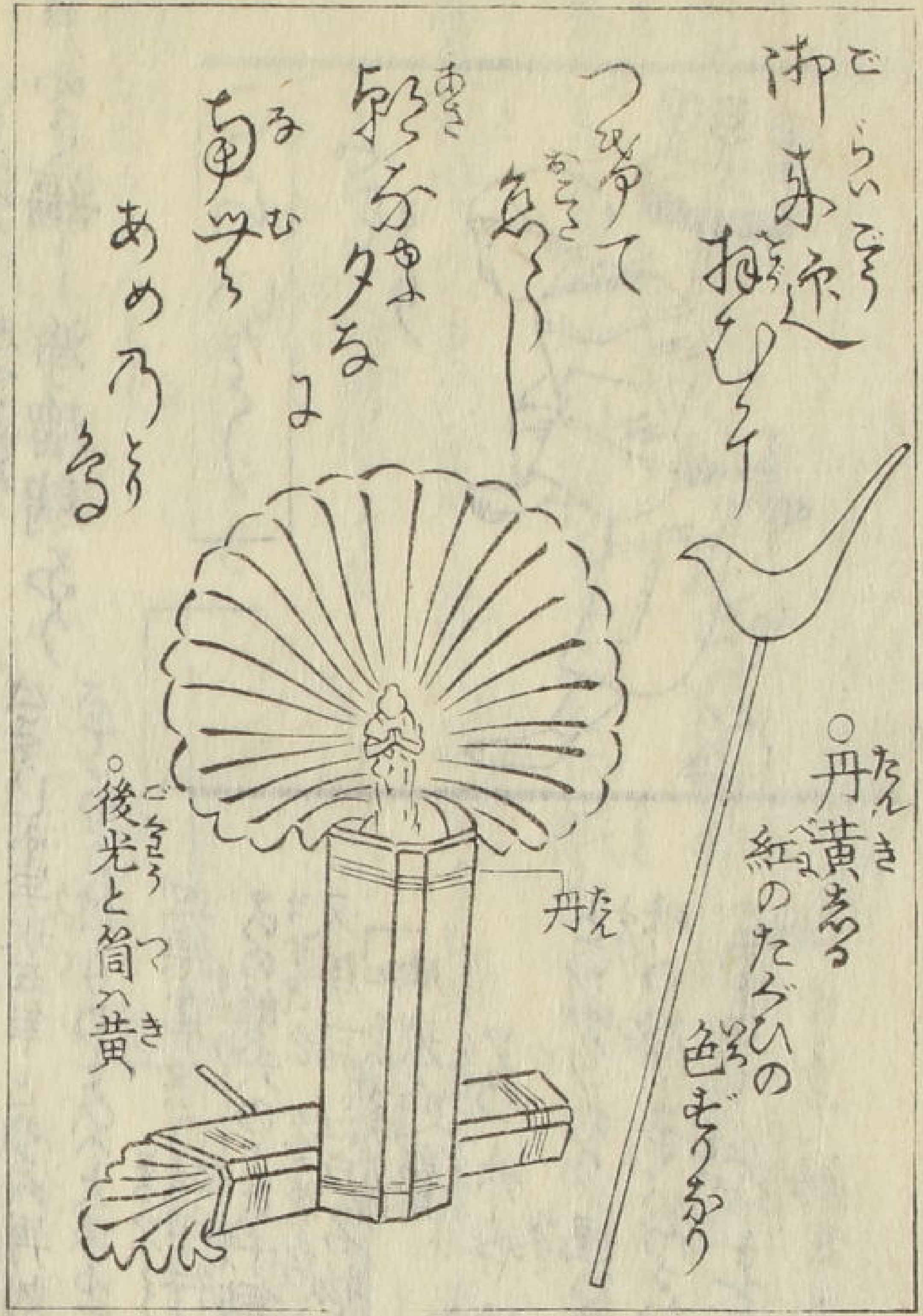
又俳諧「江戸名物鹿子」享保十八年印本

「御来迎賣 なり竹や 筵と望てかくや姫 素濃」

とのみ今あり画へきやも竹をうきたましバ摸しさまざまさて皆竹の筒よりいづるからくりを竹のあるうり生れしかくや姫にとあまりし光りをとまあつを余情にとみえたるなるべし古老乃話によりて画せるまへの圖によく合せ

十五 いとこ煮 附 須彌山

料理物語 寛永廿年 印本 煮物の部に「いとこ煮 あづき。牛房。芋。大こん。豆腐。やきぐり。くわゐ。かどいは中味噌にてよし かやうにおひくにいれまぜるによりいとこにいふ」とあり 追々に入るを甥々と從弟と名づけしなるべし 昔はかゝる名づくるに謎語のやうなるが多し 同書汁の部に「すみせん 菜も豆腐もいかにも細にきりたるをいふ



此圖はちかく安永二年鱗形屋が刊行せし「江都二色」といふ草紙の中にあり 江都二色と題せし画は重政が画 賛は其頃の老人なにがしが作なり 又或人のいはく明和七年再刻来迎といふものあり 其圖は佛像をえがく紙にて日の出のかたちを画し 是は富士山の行者が日の出を御来迎といふによりて画るなるべし

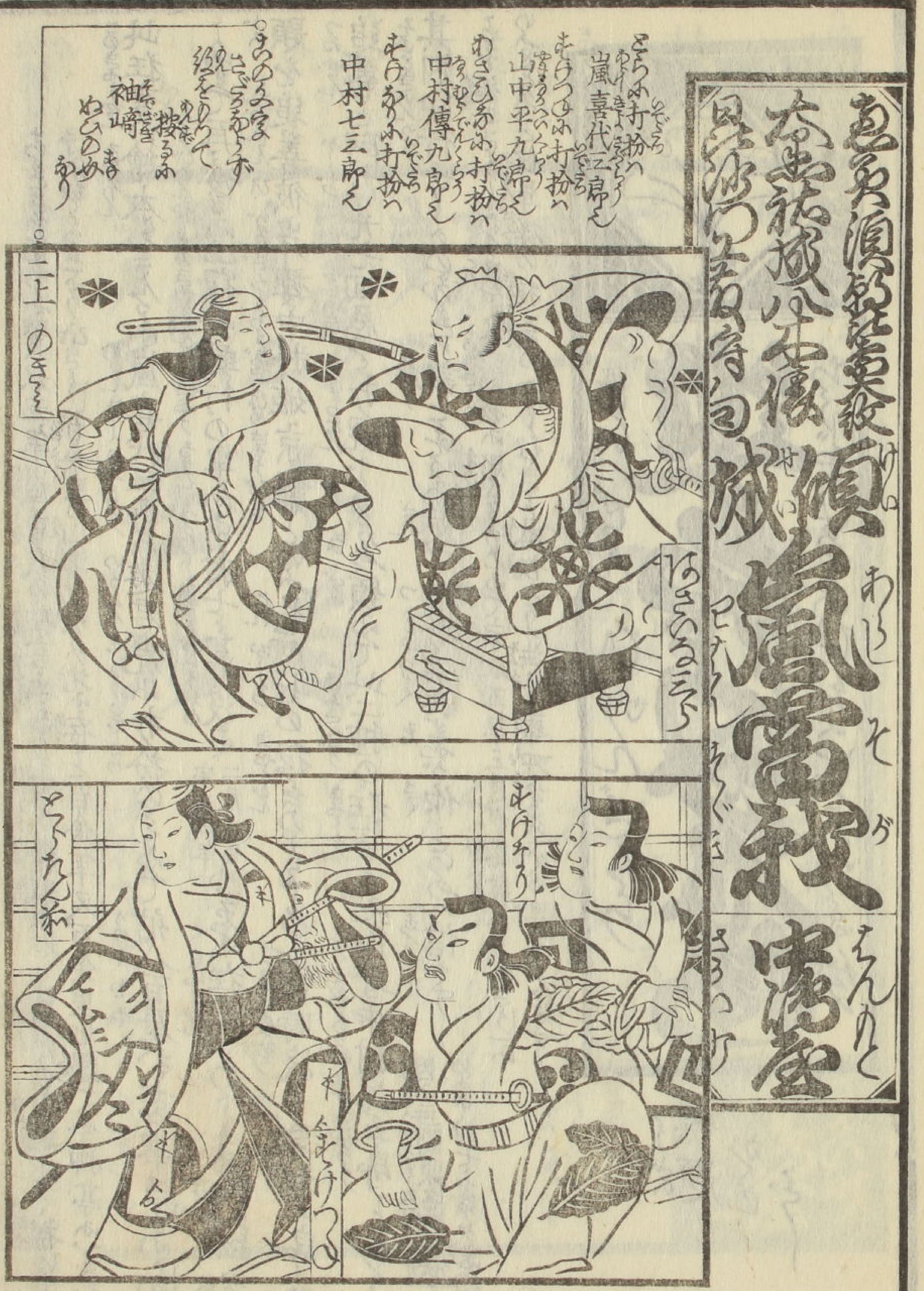
ことなるふざけしものなり」とあまたく名義を記さず是も例の謎語なり 謡曲「歌占」に「北は黄に 南は青く東白西紅ゐにそめいろのやまの須彌山とよみたる歌にて候」と ある歌によりて南青皆実といふ意にて須彌山と名づけしなるべし 汁の實をいろいろいれたる故ならん 又云この豆腐に菜を和する汁を妻を古く汁の実といへり 日本紀通證に 和泉式部と云々 今ざくざく汁といふ「男重寶記」元禄印本に「雑供々汁」の字を當たり ざくざくは菜を切音をいふにて是もざくざくの類なり 此に引用したる「料理物語」に「蓬汁。よめがはぎ」

「世話盡」明暦二年印本 四の巻に「菜汁を振舞て 寺々ではざくざくの菜汁なれど皆虚菜をざくざくにきり云」とあるによく知るべし 此書にざくざく汁の名目はみえざれど 皆虚菜を麁相に切くせしむるを世人の詞にざくざく汁といへり 以上自注 とあるなどざくざくの名もふるくよりありしなるべし すみせんざくざく汁とのみ菜のこと より出でたる豆腐のことなる汁の名目別に一種あり

十六 八百屋阿七のかぶき

かぶきの事を書る「冊子」に寶永五年の春堺町中村座にて山嵐曾我と題する狂言に

嵐喜代三郎といふ女方阿七の役をせしむ是阿七がことをかぶきにせしはじめなり
かの喜代三郎が紋丸の内に封じ文なるも是今においても阿七の狂言に此紋をつける
寶永五年ハ阿七が廿七回忌なり此法地蔵坊正元といふ者江戸めぐりに六地蔵を
建立も俗の名を吉三郎といひしゆゑ吉三道心と人よぶ是お七が菩提の為に立しと
いふ評判を狂言作者津打治兵衛お七が恋ざかひ男ハ吉祥寺の小性吉三郎とな
作りし又吉三道心は法老年にて天和のむかし地蔵一二躰建立ありしとぞ」と記して
人のよく知る話なり按るに封じ文の紋の喜代三郎に起りしといふ説ハ是
其餘の説ハみな非是より先貞享三年の印本「五人女」四の巻に於七がことを載て始
恋せる男を吉祥寺の小性小野川吉三郎にせしる又寶永元年紀海音が作「八百屋阿七歌
祭文」といふ浄瑠理も彼「五人女」の人名を仮用ひたり原来吉祥寺の小性吉三郎とせしは
偽名なる事ハ論なしさまどもやく貞享の冊子にみえて山嵐曽我の刺に津打治兵衛が
新に作りまうけしゆゑなれども又於七の狂言を山嵐曽我なりといふも誤なり



あるまさぬれのふ寛永五年嵐曽我の狂言本あり友人歌城のぬし難波の書肆にて探いでゝ
予におくられたり ふきさし百余里の山海を残りの地に存と百余年又百余里を還て今柳亭にとゞむ

此狂言の繪本を見るに山嵐喜代三郎が遊君虎に扮の所にて彼八百屋お七が事を取組みしよりて再按るに此狂言興行の半に中村七三郎没せ（寛永五年二月三日）ゆゑに狂言をあらため俗に二の名を題を追善彼岸櫻中將姫京雛とつけし是阿七の狂言のおもむきを當時没しゝ七三郎が追善と阿七が七七回忌を打混じたる名題にて此二種の狂言とも作者中村清五郎とあり其判印行せしものなき証となるに足り津打治兵衛が作とのみ信ずべし（因に云 関東名残の袂と）ことを編るさうしあり見るも其刻板に彫しものにて寛永五年三月の奥書あり ふきさしにいふ中村七三郎が末期のいふところと彼岸櫻の狂言のおもむきを略似たり法号華岳浄光 父の恩 にみえたり

中村 かん三郎

追善彼岸櫻

ちうじやうひめ京ひいな にだんつゞき

標題 かくのごとし

○ふきさしに めうゑん寺の 小姓吉三郎と あり 吉祥寺に 偽作せる 其の狂言に かゝると いふは さればこそ いふごとく あやまり あるべし
○またふ八百屋おきちと ありて いろ おしちに 作くる 姫あると あるべし

追善彼岸櫻
雨ぞうは鶯がり うぐひす こゝかしこの たまさかのとき うらみまよりけり
中將姫京雛
たわらり たゆうけん にだんつゞき

序品第一 是好
これはこのむがまく 太夫ちぬはなれわい

方便品第二 而藥
くもりうち川 おめでたし ゆうそうかの ていだよ

譬喩品第三 今留
いまそできまゐ ひさん あびま 八百屋おきち

信解品第四 在世
これよわりかざひの はたな 中村せうどう あくのゝや

さかい町 中村座 もと

此標目狂言繪本のはじめにみえて是まではのごとく八百屋お七のかぶきてあまで其趣はいまなと

いさゝか異あり八百屋お七ゐ扮の嵐喜代三郎ゐて実ハ中将姫とゆうゑん寺の小性高安
吉三郎に扮の袖崎縫之助ゐて実ハ唐橋宰相あり画中ゆゑ憚るべき事あれバ
摸し出さまで推て知るべし○又云正徳三年閏五月十五日山嵐喜代三郎没 法号華岍栄秀 其後「父の恩」ゐ見えたり
享保三年市村座ゐて富士の高根といふ狂言ゐ三條勘太郎八百屋お七の役をはとむる刻
喜代三郎が追善の為彼喜代三郎が替紋丸ゐ封文を用ふ此狂言大ゐ流行今ゐ至るまでお七の
かづきゐハ必此紋を付る事ハ種々の冊子ゐ見えて珍らしからぬ話なれど筆の序ゐ書載て置ろ

宝永五年
彼岸桜の
絵本ゐ
見えたる
嵐喜代
三郎が
姿

小字を紋ゐ用ふるハ
嵐家ゐ用ゆるなるべし

後ゐ八百屋弥右衛門の養女お七

享保三年富士の高根の狂言
江戸桜といふ半太夫節の浄瑠璃本の標紙ゐ
此の圖あり三條勘太郎が
お七ゐいでたちし
姿絵あり
かの喜代三郎が
封文の紋を
用ひしといふ
証ゐ摸し
出せり

○封じ文ハ
上ゐ見えたる
喜代三郎が紋
蝶ハ則勘太郎が紋え

○享保年間ゐ刊行ありし役者三十六歌仙一名を
濱男妓雛の内裏といふ冊子ゐ此圖あり

○享保十八年の印本「江戸名物鹿子」といふ
俳書ゐ浴泉が作なりとてお七の
狂言ハ此の勘太郎があたりし冨士の高
根なるを寳永の度と誤てある冊子ゐ
紀しよせりゆゑ混乱せしゆゑ
おのれるえ
上ゐ摸し出しく圖ゐ封じ文の紋乃
よしハ見えざれども勘太郎がお七の
狂言も喜代三郎ゐならひて流行し
證とすべし

寳暦十年紀逸が「黄昏日記」ゐ「三條勘太郎がお七も程なくその母と勤かはるまく
盛衰ハ常のことながら驚くまで情欲あり」といひしをみし因ゐいふ延寳九年乃
印本「吉原三茶三幅一對」ゐ橋屋内哀更といふ抱女を評せる詞ゐ「面てれある程
よし三條勘太郎に似たりあまた此君を勘三郎が芝居に出しまく誠の女形ゐしくえ
たれ云ミ」とあればこのふいゐ享保中を寒ゐ経る勘太郎ハ故人の名を次ぐるのなるべけれど

延寶中のかぶきの書今なく傳ふる稀ハ詳に考がたし偖お七の実の紋ハ何ぞといふに三ッ柏なり「天和笑委集」十二の巻に「七がいでたちハあさぎむくの肌ぎぬハ羽二重白小袖甲州郡内の碁盤嶋わさ染の条にて縫たる定紋の三ッ柏五所にほどけのかぎりのうらほけて大人五寸の大振袖を人にかゝる横にひろき紫帯ふさへにきたと引まはしうしろむすび結び留丈なる黒髪を高まげとりやれ中ひわげ銀ふくりんに蒔絵したる玳瑁の櫛にておゝ髪をかざへ紅粉をぬりて面をいろどりさしもあでやかにぞ出たる」とありこの「笑委集」ハ當時天和の人眼におほひたる事を筆記したるものなれバ證とすべし　予。かぶきのことをいへる役者大全歌舞妓事始なといふ冊子にいへることをはまがふ説なれバいまでも見ゆる書ハ存在してよく人のしるところなれバなり

［十七］梵天國 附 六段目

むかしの淨瑠璃に梵天國と題するあり梵天國の冊子によりて作るものなり　梵天国ハ御伽ざうしのうちにあり足利の末の代に作る書也　此の淨瑠璃ハ慶長元和の比河内。左内。薩摩等がかたり出しが傳りて貞享元禄の比までも虎屋永閑天滿八太夫なんど淨瑠璃の祝言にハかならず此梵天國をかたりたるとぞ　今も須とうふの書きりに翁名童を祝言とするなどし　そのゆゑに何にともあれ目出たきといふ祝のむねと梵天國をうくふといひ又うくふといふを略て梵天國となりしといひし諺ハ今わすれて淨瑠理を絶たりさて此諺ハ此の語をつかひそめし延寶中の冊子にあたまく見えたり「たきつけのまつひ」延宝五年印本「人の血をいくらか苦しめおのれがよろこびとなすを人なるもの仁の道にそむきたりかる男の心ぜとしてあんぜん風流なるいかなるよりあれぼんでんと急ぐものなり云〻」とありまた國の字を略凡まりそちの紙鳶に比て身帯の滅却するをいふなり又「浪花鉦」延宝八年著 六の巻新町の遊女の詞に「こぼれうといふものもおゐなどのすることでもおさんせぬとおくがんでんおくの下地ちやとおもひんせ云〻」まさにその遊女の許へ客の来てぬれうになれるを云　なにはかひハ京師の作浪花鉦ハ大坂の作也

「吉原三茶三幅一對」延宝九年印本 定家といふ遊女を評する詞に「容顔あでやかにして床のうちあつかやしてぬるとほそかつるさゝを喜しがんでん國と出るものなり云〻」下心見えたる評の褒め

又「古郷帰江戸咄」貞享三年印本 六の巻に 傾城の閨に首たけはつたる親をたはりかせ…を

たきあげて桶伏にありせうくあさぢちのうけにて逃れ飯つかへてさし王のかくへはうりえぞ
まくれびんでんおくぞうろ云」是は亡命のことをいへり又「松の葉」元禄十六年印本に載る
一夜かゞみ。といふ小唄に「げにさまざまのたまふまふはわれくるとあ。のんやれ中略かつて
かぶとのすゞめのきんちやくきんぐのぷてことひよりのこまぞびんでんおくにあるとてま
ものびくはむかせまれ」元禄ハ梓刻ありし年号にて延宝天和よりの小唄なるべし といふは意ハ「三幅對」と同かれバ其原
も浄瑠璃より出て花街の流言にてあるべし 上に抜出せし冊子へまきかまさ遊里のことをいへる像にみえたう又「團扇曾我」
「座敷狂言」元禄十四年印本 卜者の詞に「二月三月もやすまくりのこゑるがわらうそのふ節ハうちぶ
あんだんもびんでんおくをうてまゝうがあ云」此冊子と「江戸咄」にふるいふとあるをすべし
浄瑠璃どうとふとあり前の宗長が日記にみえたり 今びんでん國をうつとのふる其原を知べしして詠まるなり。偖
今たまく伝はる梵天國の浄瑠璃本と見るに細字にてこその頭ぐへ絵を加へたり是初めに
いふ永閑八太夫等が正本と称しものあり彼浄瑠璃の六段目の絵に
「それよりそひよくハやしまちらまくふうらせあひ五でうのやくこふうりくせあひてそれよりも
中なおんどのへびんでんまうのおひゝのどてんをミかどへさしわけあべきかどこえいらん

○花のさかり まきゑのえの頭にかくの天使宮のことみえたり

まして日本のたゞめしにせんとて丈夫おんどのをとらんおやうおろしこそまゐりそ
びんでん王のおかゝのおかんをおそへ五でうの所のとうおんにてんしのえにとおひ
こそまゐるまくどをとどめぶりたまをまゐりあふとうやさまざまにやてんしとあ
てんのつかひとかくとうやそのゝち中なおんどのたんごたじま八本まであれがあんどの
ごてんをあらりてわりがるしくとこ夜ちやうごいおさまりやくくへかへりさも人
わまるめしつき本まさしてかくなるまふもふまべるをふかどふかどをたてあるべ
ふゆきのあとさうんあのためしもくふきあごいありそのゝち中あどんどのとべきまま
そのりんおめといそひ天女おせんとべあれわひの紋まとうまんどゆうし在のいまのよ
までもあゝおやうさひどうしまくどをまゐりあふありまさとふおやうごとも尤老のよろゆる
ためしもくるさかんとよ下おんこんおしゑべてうとうりさもあかうくふやおうりへあらりうり
とあるが彼祝言にかゝりし文章あり百年のむかしまでも流行し浄瑠璃とおぼしく
かぶき狂言にもせしとあり元禄十四年森田座の狂言本「梵天國寶船」と題せしを
見るに彼梵天國の浄瑠璃になるひて宮崎傳吉がはくゆうし狂言あり
西鶴が「俗つれく」江戸ふきや町のさまを画て「今日よりぼん天國。市村竹之丞。山村長太夫。森田座より」とのふ看板とうけし圖あり其の冊子ハ元禄八年の印本なりべ
さればまの狂言のわかしあるべし
因に云むかしの浄瑠璃ハ徳て六段あり十二段を裂京都にては井上播磨にて五段にはじめ
こゝにとれふ江戸にても寛永正徳の比までもあれ古風とうしあるも土佐掾和泉太夫等が

浄瑠璃にも六段といふ名あれど何にもとづきしや是ぎりといふ程の事を六段目ちやわどうといふ諺
今もまゝきく所なり是は彼梵天國の意に通ずるもあり又末一段といへるもあり

江戸八百韻 延宝六年印本
前句 對決乃場かゝへまぐしき 来雪
附句 六段唄日も西山に傾きて 青雲

五十番句合 延宝三年糠塚翁判
むかしの末一段のゆふべかな 藤簾子

俳諧二番船 延宝八年印本 宗圓撰
前句 さ湯とその身すぎ見世あけくれ
附句 かの歌末一段にかゝる諸 栄親

俳諧富士石 延宝七年印本 調和撰
人形や末一段乃夏ぞらへ 素白
柳亭曰人形を木偶にとりなし末一段にて六月を労せし利口なり

三茶三幅一對 延宝九年 花枝といふ遊女を評する詞に「容顔すぐれたるぶんなし御年もすゝめや五六段目までかゝりはけなく姥入のかうぞんあるべし」云々又同く俳諧にいへるあり

前句附歌がるた 元禄十三年印本 一名馬ざくひ
前句 編笠ぬいでやすむ鐘
六阿弥陀末一段に思ひ諸 句の作者不知不卜の高点なり

是等の冊子をてらしあはせて見るに梵天國六段目。末一段の諺は浄瑠璃より出たり
○再日げんじのだん記に「あれはおやの子どもも若気をたぶる」皆家あげてぼんでんをうたへせねまのそおそろしや」といふ事あり是は若年の者をいふなるべし今琴を貪る事を取しことをいへるなり此冊子刻梓の年号を闕といへども画風をもつて按ずるに万治の比の印行なるべし前に引し〔あそび〕〔難波鉦〕の鄰にならべし冊子なり此還魂紙の草稿ありて後に見出されたればこゝに書載ておきつ

還魂紙料上之巻　畢